●　オランダにおける農業施策（トマトワールド視察）

団員　松本　博和

今回の海外都市行政視察のうち、私が担当するオランダの農業施策、トマトワールドの視察について報告する。

まず、私たちが訪れたオランダの概況であるが、国土面積はほぼ九州と同じ大きさで、国土の４分の１が海抜より低くに位置し、決して農業に適しているとは言えない。しかしながら、国土の４４％にあたる１８４万 ha が農用地であり、農産物の一大輸出国となっている。２０１２年の農産物輸出額は８６６億 US ドルで、米国に次ぐ世界第２位。主要農畜産物は、トマト（２０１２年輸出額世界第１位）、バレイショ（同１位）、キュウリ、チューリップなどの花き類等である。

（施設のマヤさんによるレクチャー）

今回、オランダの高い農業生産性を支える最新の栽培技術や農業者同士の協力体制などを調査するため、オランダ西部の街、ウエストランド市の中心に位置するトマトワールドの視察を行った。

（説明を受ける視察団）

トマトワールドは、オランダの園芸技術やＩＣＴ（情報や通信に関連する科学技術）部門などを見学・体験できる施設で、２００７年に施設園芸関連の農家が集まって創設された。安全安心で品質の良いトマトを作るため、生産者と種苗会社、大学、民間研究機関などが連携し、農業関係

者の視察受入（人材育成）から栽培技術の情報発信や新品種の開発、流通・販売に至るまで総合的な生産拠点施設と言える。

（担当者から説明を受ける）

トマトを栽培しているハウス園芸施設の視察では、一般的に見られる小さく低い温室をイメージしていたが、温室の天井は高く、拡散性の高いガラスを使用し、ＩＣＴを駆使したコンピュータシステムにより温室内の温度や湿度、光、二酸化炭素、培養液濃度など全てを制御管理し、最適な環境を作っていた。トマトは上に伸びて育っていき、ある程度伸びて実をつけると、そのネットが横に移動し、またそこから上に伸びていく。これを繰り返して成長させることでより多くの実をつけ、最小のスペースで効率的な栽培を実現しているのである。照明は省電力タイプとして LED 照明も導入が進められている。LED 照明の利点として、従来の照明であれば近づけて照らすと熱により葉っぱが焦げてしまうが、LED 照明は熱が少なく、葉っぱのすぐそばで照らすことが可能となっている。その他にも、天井が高いため交配にはマルハナバチを放し、土壌はロックウールのリサイクル、雨水の利用、排水の循環利用などの工夫もされていた。

（生産された各種トマト）

この施設の視察において特に印象に残ったことは、トマトの新品種開発の話を聞いたときである。何種類ものトマトの種を開発するにあたり、１ｋｇ（種の数にして２５万粒）７万ユーロ（約８９０万円）もする種があるとのことであった。この２５万粒の種から４５０万ｋｇのトマトが収穫できるそうだが、新品種の開発には多大な労力が必要であり、５年から６年の期間を

要することが高価な理由だそうである。また、品質や味だけでなく、温室栽培か露地栽培か、見た目、病気対策、生産性、環境への影響など市場へと出回るまでには様々なハードルがあるため、どうしても小売価格は高くなるとのことであった。

この度の視察を終えた所感として、現在、松山市は農業施策にも力を入れて取り組み、農家の収入増を図っているが、世界でも先進的な取り組みを進めているオランダを視察し、農家１人１人がバラバラで取り組むよりも、トマトワールドのように、それぞれの農家が業種ごとに連携を取り、配送や加工、販売、研究開発が一体となった拠点づくりの取り組みをスタートさせていく必要性があることを強く感じた視察であった。